

そういえばリチャード・ビューリックがもっと重要なこと、肝腎なこと、時間を教えてくれたことを忘れていました。時間の最も基本的な性質を。

——どんなふうですか。

この世で一番簡単なやり方でね。ある時彼の授業に三十分も早く着いてしまいました。なぜかというと、私は動き回るのに定期的な交通手段よりも、ヒッチハイクに頼っていたものだから。さて、彼の家に着き、扉を叩くと、彼は扉を開けて言いました。「三十分も早すぎる。正確な時間に来なさい。」そこで図書館に返さなければならない本があったので、この用事に時間を使いました。図書館に行き、本を返し、彼のところへ戻ったんです。三十分も遅刻して。二度目に扉を開けた時、彼は憤慨していました。その午後彼は二時間の授業をしましたが、私の宿題を見もせずに、時間についての、音楽における時間だけではなく、音楽を志すあらゆる人の生活における時間の重要性についての講義だけをしたんです。

(ジョン・ケージ「小鳥たちのために」、青山マミ訳、青土社、p.52 からの抜粋)

かつて音楽は、まず人々の——特に作曲家の頭の中に存在すると考えられていた。音楽を書けば、聴覚を通して知覚される以前にそれを聞くことができると考えられていたんです。私は反対に、音が発せられる以前にはなにも聞こえないと考えています。ソルフェージュはまさに、音が発せられる以前に音を聞き取れるようにする訓練なのです……。この訓練を受けると、人間は聾になるだけです。

(ジョン・ケージ「小鳥たちのために」、青山マミ訳、青土社、p.60 からの抜粋)

「歯科治療をへて」

大和田俊（アーティスト）

最近、歯の治療を行なった。かつての治療で残った神経が原因で、知覚過敏になってしまったからだ。ちいさな刺激が増幅され、下顎を垂直に下降するような痛みから逃れることができなくなり、渋々歯医者へ向かった。歯科医によると、こうなった場合は神経を抜くのが一番だが、血液や栄養が届かなくなるため歯は脆くなる。よってまず神経を抜き、その後物理的な補強をする必要がある。局所麻酔を行い、小さな土木工事のような方法で、人知れず温度や圧力を感じ取っていた神経を除去する。そして歯から知覚の機能が取り除かれ、痛みがなくなるというのが治療の流れだ。

治療はそれ自体で症状とは別の痛みを生じさせるが、麻酔によって知覚が人為的にキャンセルされると、私の口内環境は物の集合として扱われることが可能となる。治療が終わってしばらくすると麻酔の効果は減衰し、弾性的に日常が回帰する。

ここで思い出されるのが、2000年代初頭のソフトウェア・シンセサイザーだ。現在にくらべて非力な当時のパーソナル・コンピュータ上では、発音命令から実際の発音までに、音響合成のための演算が行われることによる遅延が生じる。聴覚上はたんに発音遅れと感じられる時間の隔たりの内で、演算が行われ、それが畳み込まれながら、減衰しつつ聴覚システムに到達する。私たちは、ただそのあいだを受動的に待機するほかない。この遅延は、原理上除去することは不可能であるが、現在の高速なコンピュータの上ではほとんど意識されることはなくなった。これは、実用上歓迎すべきことだが（コンピュータが生楽器とのアンサンブルに導入された一因でもある）、私には能動的であるような聴取と受動的な待機が重なり合う、この局所麻酔のような時間についてこそ考える必要があると思われる。

（『新・方法』第63号に寄稿した文章、2018年）

タイトルの『破裂 OK ひろがり』は元々、インドのトラックやリキシャーの後ろに描かれた“Sound OK Horn”という文言から来ています。インドにはほとんど信号がなく、車同士がクラクションを鳴らしながらその場その場で交通上のコミュニケーションをとっています。その光景を目にして（耳にして？）、局所的に響きわたる音があちこちで連鎖し、空間を広がっていき、中間的な構造を介さずにインド亜大陸の広大なスケールに至る、という音響的なイメージを持ちました。

個々の車を見てみると、“Sound OK Horn”や“Horn OK” “Sound Horn”などのサインが「クラクションを鳴らしてください」という意図で（ほとんど手書きのレタリングで）描かれています。この呼びかけがトリガーとなってクラクションの連鎖を引き起こしているというのも興味深いのですが、“Sound OK Horn”の英語としての不自然さも面白い。

英語としては“Sound Horn Please”あたりが適切なのだと思いますが、街中にあふれるこの不思議な注意書きを見ていると、OK が図像的に中心に来ることで、文法的な繋がりや束縛から離れ、言葉が図像的に散らばっていくように見えてきます。三つの語の間にある空白は文法上のスペースというより、空間的な意味での空白として考えられるのではないかと思っています。

たとえばアマゾン火災によって二酸化炭素が増加し、二酸化炭素が地球規模に充満し、かつ広大な焼け跡ができていること。すこし歴史をさかのぼると、近代に酸素が発見されるまで、空気は「空気の基」と「火の物質」からなると考えられていたということ。局所的に起こっていることが空間を通じて伝播する。それに先立って空気が備えている離散の契機について考えています。(2020/8/9)

(「破裂 OK ひろがり」のフライヤーに掲載された文章、2020 年)